跡見短大図書館蔵書

伊勢大神宮祈願の図
洛東九山四季風景
和歌三神之畫像
名所月八景歌畫
五節句女用文章
色紙短冊徳様之事
和歌懸紙仮草徳様
洛西小倉之風景

本朝賢女鑑
唐土貞女傳
三十六歌仙
小倉百流折歌之図
数香業之名方
女中大和絵
百人一首之謡曲
目録終

藤原

伊勢大神宮

伊勢大神宮祈願の為
上京ハ院ヨリ使ヒ人ニ女房
かりハ院ヨリ中文ふく
おくり物ゼ一対神ゝ事る
事ゝ有候ハ〻ゝと申ふ
ゝ思召ハ成人八幡様
とする和尚堂ハ帝ハ
のゝ紙ハ花の枝ふ祝料
紙をもて伊勢ゝ
りゝ人ゝ使ハさる
いかゝ乃やれ
初の八を掛
けゝ九をん
白いわゝる
こ候ゝ文ゝ乃ゝ紙と
ゝ使ゝ人ゝ感歌ゝ文
中紙初ゝ

後鳥羽院
御製

人麿大明神　播列明石浦須磨在

かたらひあはれ浦の
海ぎりふ雲かくしゆく
ふるさとぞ思ひ

ひかりと若ゑ
ちぐやうづ
の

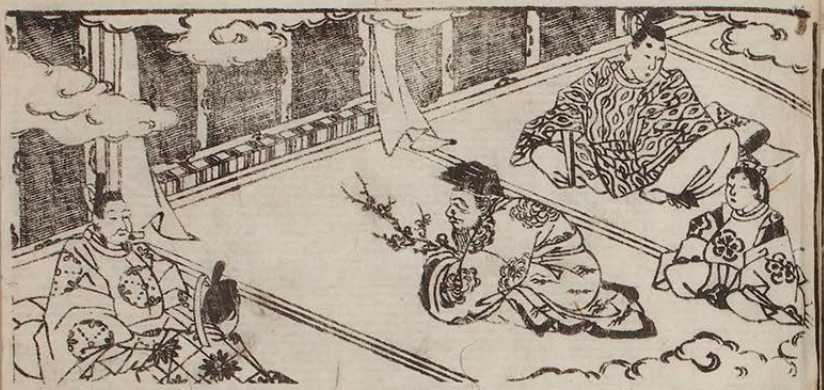
住吉大明神　摂列住吉須磨在

久しきせゝを
いまるそあてこ

春

立つ人つゆゝも
ひせん
あとあもこん
ゝ

玉津嶋大明神　紀列和歌浦須磨在



天智天皇

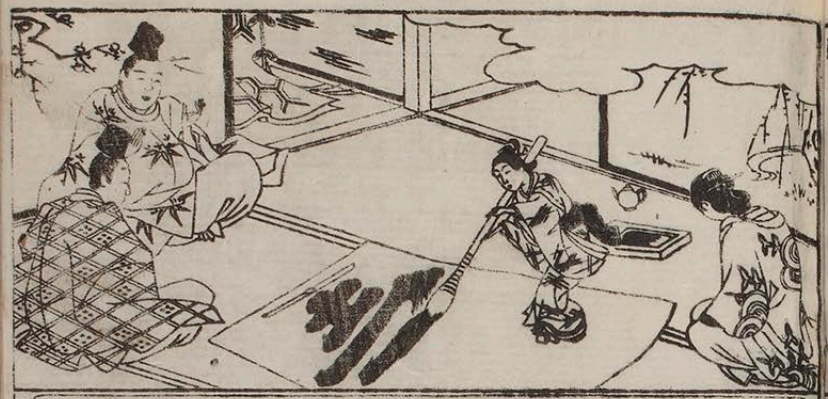
秋の田の
かりほの
庵の
苫をあら
み
衣ほす
ま

春

和國名女實記
○延政門院
持統天皇
柿本人麿

○池田の積聖かう

玄免は津の国池田の里の商人
れ娘なり天業おこく大文字を
能書なれば世の人寿夭の思ひ
をなしく感じ[illegible]
大国より[illegible]玄免を召ひ大文
字を書しめんのふふ文字ふろ
ゑ書くる気色もなく一張いを
しく書なれば諸人感じ[illegible]
免しかくしかわくも猿丸と
名を絵りくる今も吉野の
西天王寺れ[illegible]師堂ふ天業
書く書くる筆法[illegible]
迎[illegible]



山重赤人
田子の浦よ
うち
出て
見れば
白妙の
ふじのさらゝ
まはふりけ

猿丸太夫
おく山ふか
くもみぢ
ふみ
わけ
なく鹿の
こえ聞ぞ
秋はかなしき

○若狭の万女が事

万女は若狭国の百姓なれども十歳ばかりの比より糸をぬき十二歳の時よりこゝろ強く成ぬれども恨いとゞの秋かこそなきぜつくらせ方へ冷しけさへ絶よ

国守はつゆひ万女を石よりもらるゝ独身別くらの雑部を出しあれゆく秋のあしをうれば

万女そうにへば

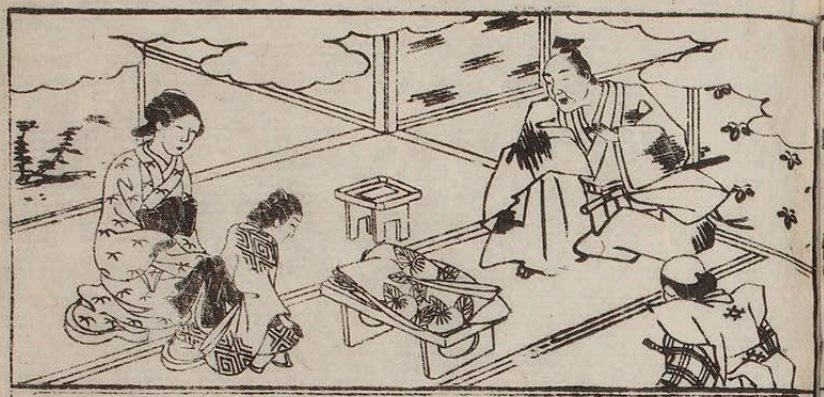
をもろ移の衣ぬくしく表ばくべ

おきこの人ぬてをにうれなりをを

とよみくちをうれば国もたゝ

頭じゆひ数の貌をおうるる

あもろ迫くをたのうも



中納言家持

鶯れわるを

はしを

をくら

ゑの

ちるあき

を

ゑまバ

秋ぞふをふるる

安倍仲麿

あまれ原

ゆを

さゝ

うれむ

かをの

なる

みのさの山ゆ

出し月うと

○皮女菓枝の事

菓枝は摂津国志津の漁者の娘也。智恵さうしく心さかしく容貌美麗なる上に十一歳にして秋の夜絵を風流ふかく作て伯母の許へおくりける乃中に歌の人丸なひ具さに書うといふ。紅れて下うり菓枝とうあへど一首のおとゝ孫を山川の淵かもむ恵の孫ふそうるかといへるさハあるとき歌の人丸感じめでゝ父母ふ乞ふゝ郡へ呼ゆき秋子として御所へ召仕ひ出しるるゝなる感上人ふぬゝ思ひ菓枝乃ゆくゝ物語

○國姓爺が母の事

國姓爺が母ハ肥おの松浦の産へ大明の老一皮郭公が妻と成さ慶長年中ふ亥去へ海を渡り山附ふ姓爺ハ雑賀と名乗ろが又の一皮敵小生捕まと福建の城まで攻落され皮ぞもちろんに落ひろろふ姓爺が母のいふハ命なりそ敵のそふもろう敵と交なばまや我さまくの孤斗ふ抱ぢなを生日なとろ

蟬丸

たまこや
これ
ゆく
りも
うへなれを
おれくハ
ちゆもちぬを
あふさかの関

泰議管

和田れもろ
八十
鴻
のけて
こえ出ぬと
人ハ去よ
あ戸の内ふ

○児徳氏二女がうの
児徳氏の妻ハ二人の娘を姉を
ゑ代姉と妹と呼世といひ父母ハつ
うく者ゆく〻そ〻父死しより
姉ハ仏の乃をれ〻絶しく他
家嫁そろのんなし母なろ人も
こゝをとゝひ姉ひ者ゝう姉の子代
ゆはしとやて又こ風ゝくこてゝん
母れ作ハそゝびゑ〻教訓と
いひやさ二番ゝくこをゝ
ゝれかく風ハきゝぬわゝハあ
いづちいさうのゝげをゝゝん
とひこやかゝゝれ月のうゝくハ
ゝゝのゝれゝどゝワぎゝゝのゝハ
よのあのんと判ゝゝいひ
やゝゝれゝ妹も感んゝ母ろ
ゆゝちゝゝひゝろゝ

○小野村九郎が母のう

九郎[illegible]村家[illegible]士[illegible]之[illegible]ノ

を由[illegible]ふ対[illegible]歌ど

対[illegible]どもこ年老[illegible]母ふ

ふ[illegible]孝[illegible]孝[illegible]

を奏し秋[illegible]母ふ[illegible]の

仇を報[illegible]と[illegible]こ[illegible]

兄[illegible]秋[illegible]

[illegible]行[illegible]歌を[illegible]

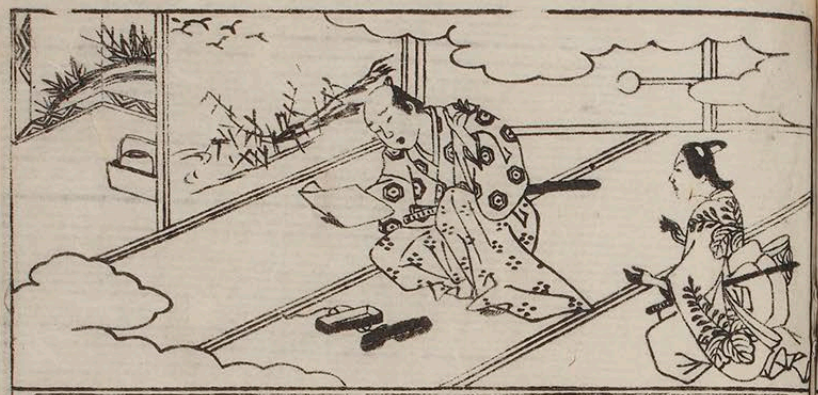
[illegible]に[illegible]

[illegible]細ふ孝[illegible]して自害して

死しこの九郎母の義[illegible]

[illegible]ふ歌を対て[illegible]

[illegible]万代ふ[illegible]



河原左大臣

みちのくの

志のぶ

もぢず

摺衣へ

ふ

こゝ様そも

わがなら恋くる

光孝天皇

君が幸め

春の野ふ

出て

[illegible]

[illegible]む

我衣手よ

雪を降つゝ

○花井左近が妻れる
左近い清井伯耆守の家士
なり伯耆を滅亡乃時左近
と対死せり此時妻八十六歳
ゆくゆくひおれ夫女かんむ
りをあきらの人多かりれども
文かれらもどんまハ義をちつて
君の難よ死しこう其まあし
て伯ぞ貞女の乃ふそむんやと
云く絶よりの池ふ身を
なげて死しこう辞世を
なぶらへこうれをえるあれ
かるしさまをるかさと
をゆるいけるり

中納言行平
立わのき
いなばの
ふれるか
おるる
まつときは
今うへまこと

○山縣新藤次妻のこと

新藤次は名なる浪人かつ武田勝頼に手だての武士を召抱へ

[illegible]

[illegible]

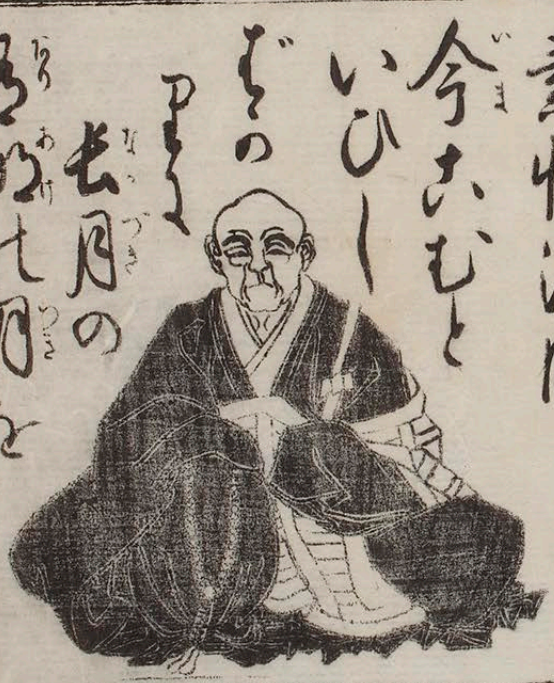
[illegible]

○親人萱女が事

萱女い雅波ふかくきかれす女くさ一筆の時俗毋ガ人の住吉の色うを里小ぬ小のくれもむ人れ河小表ハを居ろを家の外面と橋のまのまて花のひハ迫きのろろ人むを暮く波わ今と行言ハむくつけきの人のまてんかく花をまれて降も知し萱女んくく思ひて一そのおをれお幸くく立ろうあはるをとまれを花の情をんハきで又ろれくを古考ふせよこれれをんくんかれ人まてもスにゝろ ひてをれろれを人をろしとれり

元良親王

もびぬまこバ
今ちと
むるゝ
なふは
れる
方をけくし
ても
わもしとをれり



素性法師

今はむと
いひし
ぞの
ま
出月の
雲ぬれ月を
まち出けるの
ふ

○辻井油がう

油はさるべき武士の嫁かう
辻井油のかを嫁して貞女高
のゆゑ人ほめと又連歌をぬく
名句多し　ある人の句よ
あもうれ世といとしさのつれ
なう句ふ人し付なやこころ
ふ油ぶ付句よ
夏深き波へで波を長き
山付句をせ人賦ぜ〜ら〜
すぼし又坂きの数句ふ
年のさや焼て結数の数き扇
とせ人〜とい人の名句ふ
ぞうや近代の名女ぞう

文屋康秀

吹からに小秋の草木しをれるまは
むべ山風をあらしといふらん

大江千里

月見れば
ちぐさに
物こそ
かなしけれ
我身ひとつの
秋にあらねど

神酒祝

長い方は生るうそ　先ずれば
上へ　うすく　ふるると　長いもの
長年の酒とも　年のこと　入れ
うれし　神の　ゆ　入れ
きとのもち　仏神をおろし　右
手に　古持ち　おを　手　巻
和　この　男女　もかな　作る
長生　敬裏　玄　秋酒
不老門　前　日月　延
神　ちてしまび　水の　まと
ろ　ふれ　ぎやちらん

○唐義酒の方
白朮　桂心　防風　一々
蓽茇　山椒　桔梗　大黄
右一味ふ　て　絹の袋に入
大晦日　手　ふり　酒　ちて

七夕奇遇

○衣のまふかさ〻笠や七夕乃
ひこぼし〻のこゝろ〻ん
○七夕乃天れ河原の岩ゝく
うゝもてゞはわうぬこの秋ハ
○まゆかとそ去 畳の美琴や
神秋うゝ藤のまゝ〻かゝゝん
○天れ河のちゞくたゝぬとゝ去さ人
ばうひの星とけさやゝゝん
○それゝゝ去ゝ去ゝ者ゝ形ゝ彩りぬや
ゆゝべの月乃ばゝゝむゝ
○天の河きろ去れゝる久ゝる去
美のまろもれゝの人形ゝゝる
○七夕ふのきろ衣れあけゝふ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ [illegible]
○ 天の河ざゝの秋はやゝ[illegible]
なゝ[illegible]
○ 年[illegible]
○ 天の河[illegible]
○ 天の河なかせいとゞよ[illegible]
なゝ[illegible]
○ 七夕[illegible]
○ 秋の[illegible]
○ 神[illegible]
○ [illegible]

源宗于朝臣

山ちとハ
みるゝ
さびし
さ
ゆふ
くる
人めも
まを
かまこゝ[illegible]

○ 秋の夜[illegible]
○ 七夕[illegible]
○ [illegible]
○ 万代[illegible]
○ [illegible]
○ 露[illegible]
雲是殘粧
○ 去衣[illegible]
紛紛浸流
○ 憶得[illegible]
竹竿頭上

凡河内躬恒

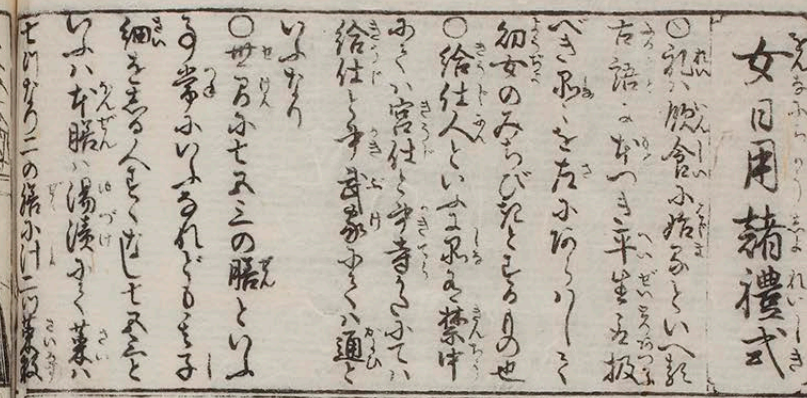
さくらあてふ
はるゝゝや
おゝん
神[illegible]の
[illegible]まゝ
ハせる
さくらだくの花

女日用諸禮式

○礼は膳食ふるまひのこと。へりくだる。古語にもつゝしみ平生を扱べきぶこゝろをたかひらく。細女のみちびきをしるりの世

○給仕人といふは客を禁ぜ。あくい宮仕しゝ手者ゝふてい給仕しゝ手者ゝゆくは通といふなり

○世ゝふせゝ三の膳といふ。ゝ事ふいゝるれどもゝゝ細ゝをまゝるゝとくゝ世ゝせゝゝといふは膳は湯漬ゝく菜は七ゝなり二の膳ふけ二ゝ菜



王生志岑
有時丸
けれぬく
凡えし
別き
ゝり
あのつき
ゝゝを
ゝれのはれし

坂上是則
ゝ事
ゝ
時の
月を
見るまぐ
ゝれゝ里
ゝまれしゝ
ゝ

三つのなりこの張ふ汁二つ茶数
三つ入れてこねるべし
○膳のもとへやく出るゆくハ
多出れば品といつく一間ゆ
二人半ずつ居て結を名決通の
人へ渡るく是ハ座敷ゆ
人へ渡ふまそのあとし和結れ
ねすくハ左の手ふく結の中結
をこちらく結て結の縁へかし
右れを城かゆ志づふ結ゆく
べし結ゆ間ハ名ゆいふハ膳の
下ゆ三人ゆ先を乃ろ
人ゆをいふ和結ゆ結る時
第人の縁ゆ六ゆ斗あるる
すべて五ゆ品ふた右乃ゆや

おしへ入ゆ入べし
○飯の食やゆ おしづ二巻
斗食て和けをを吸けの
実を食又飯を食ゆ
左の菜ゆ食物ゆ
ふくも精ををのゆ食物
ゆゆ
○湯漬食やゆ湯を後ゆ時
巻ふてそと飯をおしひろげ
湯をセゆかどに入べし
湯をとゆけく後ハ汁を吸ゆ
ゆ
ゆくゆるべくゆ菜ハ多和
入ゆるべし
○赤飯強飯の時赤飯ハ

春道列樹
山河の風の
かをるを
ぶくを
なごれ和へ
をみちなりまり

紀友則
久かゆ志
元の
はどけ
春の日ゆ
志ゆん和く
もゆちゆ

小豆の入こうをいよ強飯と
いへハ信おいよ白豆のようなる
飯やくハ粉めこう盛て出さバ
もぐ小飯てこう自然を
ぶよ入こ出たう又ちこ方
なぐふ盃て出たるわこだ
笑ふくかーをくひこれたろ
をれ中こそ抜こかこ考こく
飯べー勝負の飯やこうを
おこう　ようなこうこう小豆へ
勝負を出たるかこバこつる
切こく出こべー
○揚枝すたのよ男ハ宜
又歩法昨ハ六す　女ハ又すの
ものといへこ

香の事

○蘭奢待

上々の伽羅中ちとく中美ひう
々沿い時又々中出次第ふ性
よくかろうに性くがかろく匂れ
香かろ東大寺の宝物也東大へ
寺ゝも云天下第一れ名香し

○太子

いつもとかろくきやちやまさて
出よい法隆寺の宝物也法隆
寺ゝ云事徳太子のけれる木
なろまようをゝもて

○紅塵

上々の伽羅性くがろく香を

一位楊貴妃のうめまかりくらし

○中将

上々の三那性ゝ名ぶ方して
ゝ名やふきゝかろ

○盧橘

上々れ三那性ゝ性出ゝやく
性ろく出ゝてきろも又ゝやし

○富士の煙

ゝきやちゝれやうやく一性ゝ

○楊貴妃

上れ伽羅中ゝめしくかろ
ゝれゝちよれみてきく
ゝつきゝやゝかろきゝれい

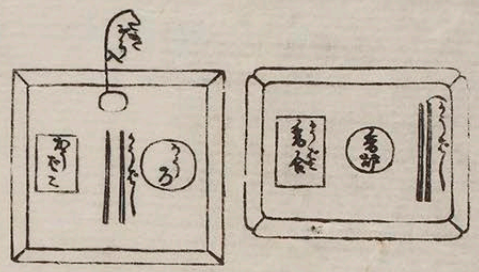
○神示

ゝきやら志賀の名れ香よい

○袖香炉　白象　蘭

是一本ニ沼ことしてほそふ名づけたる近代の名書あくし

○香煙出し　ちくのう



右の薫れとく焼くく今くバ

右近

えんくまく

光をバ

おもくびち

うひて

人のいれちゝ

おしくをいるゝ

薫物れ方

○梅花方

沉香八分　丁子二分　甲香三分

耳れ　白檀二分　薬隆三分

麝香

○菊花方

沉香　丁子二　甲香三分

薬隆　白檀　麝香二分

○墨方

沉香四分　丁子二分　甲香

薬隆　白檀　麝香二分

右刻こ蜜ゆくたのハ切ちくく

ほきそのゝち壺ゑ入云ふ

るり三ハ入日夏ハ三日秋ハ

七日冬ハ十日ばかり

泰議等

沸茅生の

をれ

志の

ゝ

ちれがき

あまもく

などの

人のこひし

旬袋乃方

○ちとせ
一ちやう　ちやう　ちやう
梅花　ほーや　ほーや
白ごん　丁ゑ　丁ゑ
○陣風
一ちん香　白ごん
ちやう　ちやう
丁ゑ　丁ゑ
○梅の下
一かんちやう　二ゑ　丁ゑ
白ごん　ちやう　ちやう

右いきもさかさまに少酒とあ
ちやうちやうはかりふちいさい
紙小包に恵やうの紙二枚よ
ばきさて寄りひく緒の鼠入れ

女中大和詞

○米を　うちまぜて
○味噌を　おむしーと
○醤油を　おさしと
○香物を　うーくと
○寸酒を　わま九こと
○酒を　九こんー。

○ひーねを　さーとーとかう
○もんこを　ほむしーと
○だんごを　もーぶーと
○掘木を　いしーと
○切乾を　おーしーと
　　くーびーとー
　　帝国の公方様

○豆腐を　干そーび比都ぜ
○干瓜を　かーくーと
○豆腐を　おうべと
○きーぶを　おうべのーこと
○でんぐを　おでんと
○がーぶを　おくぎと
○一切れ魚を　おまるーと
　　夫那ハ天皇の酒し
○鰉を　おさざと
○鯖を　たーぐーと
○鰯を　おむーこと
　　ひされたおぐれたこと
○鰹節を　うーくと
○焼鮒を　焼文ーと
○かずのこを　粕くと

○鯛の魚を　おおまをらを
○ゑびを　ゑをびをらを
○鴨谷を　くろとらを
○小鯛を　こだいをらを
○鮎を　あゆをらを
○ごまめを　ごまめをらを
○れんこを　れんこをらを
○湯のこと　ゆのことを
○入新炊を　いまごはんを
○大根を　だいこんを
○熟柿を　ぢくがきを
○そちを　ぢつきをらを
○小豆粥を　あかがゆをらを
○清汁を　おすましをらを
○ろくろを　ろくろをらを

中納言胡志

あるすれ
をえて
なく
ハ
中
人をと
角なも
ろさまま

謙德公

長生と
ふ
人を
おも
ひえで
角のいくばくふ
なるべきもの

○ねおと　おいろとう
○ちさを　おまひろとう
○ゆを　おひやしとう
○利刀を　おもをとう
○鍋を　おかしとう
○顔師を　墨のかちとう
○盃を　おあとう
○寝ると　おちづるとう
○ちくを　おもろかろとう
○饅頭を　おまんじとう
○ちをを　おまんとう
○拍板を　ひちびとう
○こねを　まちうとう
○外を　ほうとう
○こふやくを　ふやくとう

○かしとびを　かしとう
○糠みそを　さぬかとう
○ごがうを　ふうとう
○大小夜ふけを　おそふかとう
○さげの志んを　ふぢの花とう
○ちびの穂を　くろうとう
○よ兎をふ千大根の入るを　やまぬきとう
○うこれを　ふれぬとう
○白米を　根ぶれ米とう
○ぎいきけを　あのおつけとう

十二月の異名

○正月は 初春月 初空月
○二月は 如月 梅月 初花月
○三月は 弥生 桜月 衣更着 梅月
小草おひ月
○四月は 卯月 花月 花見月 卯の花の月
○五月は 皐月 菖蒲月 菖月
花のさつき月
○六月は 水無月 風月 月不見月 満月
○七月は 七夕月 文月
女郎花月 秋月
○八月は 葉月 月見月
秋風月 幻深月 中秋
○九月は 長月 菊月
初菊月 残月 稲刈月
○十月は 神無月 時雨月
小春月 神来月
○十一月は 霜月
初霜月 雪月
○十二月は 師走 春月
極月 乙月 除月
右のかゝ月の名を通し
れば女中詞の名のゆふ
ゑ〜ざまいろ〜略を

産帯秘鑑

○それ女子懐胎して月数おもく大切ふとべしそだちく病に行ようて産せば母子共に悪き事を産ばあるべし母子共に悪き事を産ばあるべし小付なるべし物産に夢不平和なる物を食しく気をこころ慎べし又産ずなるべし計条もろ事るべんみぐろ小茶を飯のかゝる事るべんこと物をねく辛労をるまるべ産のきこゝろ慎不へのやうを検閲なるべいるるべん

[illegible]

右粉末にして芝を煮じ[illegible]
けにて飲べし 痛強くば
後の酒ものしくふく酒勿
○悪阻ふくめるとは又食
物ふくれを治す
[illegible]

右一服式匁宛にして生姜
三片入煎じ飲べし 痛きハ
一服ふく治もるなり
○催生れ秘方
白木 白芷 桔梗 茯苓
枳殼 干姜
右者のごとく煎じ用べし
むまれこびしいのなし
○又方
雲母の粉をたくわ酒にて
用べし 奇効なり
○横産ふせれんとする時ハ
産婦の右の足の小指の
爪ふ麦粉やどの姿城三

儀同三司母

わすれじの
ゆくすえまでは
かたかれば
きのふけふ
のいのちの
をしくも
なしと
おもふ

大納言公任

滝乃音は
たえて
久しく
なりぬれど
名こそ流れて
なほきこえけれ

○男花痛み小梅干そのほかしばらく煮じ用べし

○又方

木藥子皮　蕪木　白芷

川芎　白芷　えちご

右せんじ用べし　ちきを芎芷湯よりよく名方し

○又方

五靈脂を炙つて粉にし温酒にて用べし

○後の子胸へはきのびて仏痛さいはられ法を後へ巻屋し忽絶れなりこれ文仲葛氏が秘法なり

和泉式部

あらざらむ
この世の
ほかの
おもひ出に
今一度
あふことも
がな

懷胎十月教訓

神月　かるち白あれ
清しめや
一ちげく
つるの
ちちの
おけば
くれなゐの水

卯二月　桃のくれ
その
つちの
みえ
やせ
そぶら
くれ
くさきの
くれのいろ

紫式部

光ぐり
わひて
見しや
ぞきし
とと
きのあまま
雲かくれ
月の月れ

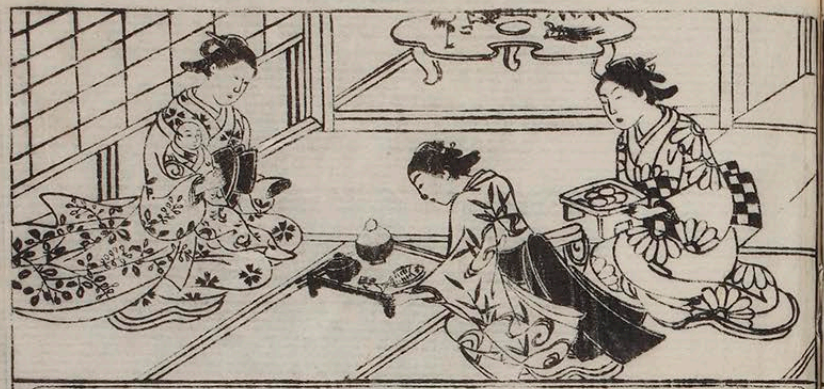
大貳三位
を馬山いかの
さ〻〻〻
風あまハ
いぐ〻
うよ
人を
ら〻き
やハ
る

赤潮清つ
やもろハぐ
祈あまし
ものを
さよ
ふけて
かく渡く
まぐの
月を
うれ
う

小式部内侍
大江山いくの
乃のそをゑ
ゐ
ぬ
も
見ぬ
あまの
橋
立
いふ
しへの
なを乃
都れ
八重
九重に
匂ひ
ける
伊勢大輔

人間一生之祝

○又図めでたいとて帯
[illegible]
毛織ふくも二筋丈ぬたの
袖より女方の左れ袖へ波を
織れてむすび袖ろ法也
浪ハ袖くの織よの袖ふく仕
うてもはし袖さ後帯ハ表
るのかにれ衣服ふもるし
○綾織ハ白毛織二尺半ハ
て袴を紅形ふくか染へ
○袖ハ黒ぬきて百二十目
なりをを染の上よのせ服を
か身えて脱れよ紅ふ垂是
を袴といよ五数り作成



清水絢言

秋をこ先ゑ
毛れ花ゑ
てるる
ふのふ
さのの
関ハ
ふ
さ

左京太夫道雅

今ハ
ひ
な
と
ぞ
人
ゆ
ふ

衣服染物

○紅梅染の法　もゝ〻四十匁　かつをやき　十二匁
ゆぐんこを　右の式作入て煎
あゝ一出し　茅屋も潤るなり
○柴胡ゞひ染様　赤を注ぐ
あゝ一出し一番染とし別よ
芋枝れ干こを焼灰
二番染とゆく灰汁ふれ
こ灰汁をおの染物へむ
かれやふうありこ色ゆく
おもゞ灰汁をうけべし
出ふまゞひこ
○中紅絹染やう　黄木百匁

攝中納言定頼

胡蝶の舞
宇治の
川霧
ゑゝ
ぐゝ
あゝ
もゝる
濡れけるかな

相模

恨もび
かさね
袖ぶる
あれ
それを
恋よくちなん
名こそおしけれ

黄稲四十目　肥松二十目

右一所ニ煎じ出し漉て粥ニ
生姜と栗の大さ程入て食し
天気ゆゑ紙干なり天気
悪ければ乾しかたし

○水ひさ紙漉　灰けん二升の
中へ常山の実を一升入て
一升入合ニ煎じ詰め実を打
ひしぎ汁に漉て漉るなり

○ちやれ柿　梅汁ゆく下漉
をし易ニ灰を水ニてゆるめ
汁ニ浸置バ梅汁のあくを
ぬきさき色よくなる

○とく竹漉　下地を乾よ
漉さを上をこなの長
けかし漉るなり

汚物落

○惡しき衣服を水に入れし物は油かすとうらぶ滑石にて擦ふしくるを水ふきみ紙を当て火熨ふくいくきびもなづきべ常くなりるこ個しを絞ハおちぐるなり

○雨をんれうをろうは布海苔を煮てたべし

○たこをの脂れ付るふはるごをのをひくとりを付て洗ふべし奇ぬるり

○漆の付られよハ抹香乃灰を灰けふきてあらふべし

○酒のをみ付るよハ酒糟を水ふきてあらふべし

○漆の付るよは味噌汁或煮ゝ洗ふべし

○鉄漿の付られよハ砂をばあらく先たらふべし

○ろうをられ付るよハ山の

三條院

さく海をあらぐ
うれ世ふ
なぐらへば
恋しかるべな
夜半の月の姿

能因法師

嵐吹く三室の
山乃
もみぢ
葉ハ
竜田
川
にしきなりけり

芋をねろしあるゆくゆるゑ
あまゆくあるふべし
○芋柄山掘など付るれよハ
極弱ふてをゝ紀法ふべし
○膿血の付るよハ小豆の粉を
をゝ付て法ふべし又飯粒城
りみはをゝくたるふもよし
○染染の抱れとしやゝ泡と
あゝと合せ染抱を煮まゝば
白く成なり
○藍染れ抱れとしやゝ石灰
あふゝ煮まゝ煮まゝ蔵るなり
○領垢の付るよハ湯を煮
ふて上をなりまゝ煮ハ領垢垢
付く蔵るこのなり

良運法師
ちゞしさよ
宿城
うち
出て
なるむまゝは
いぢことおれし
秋乃ゆふぐれ

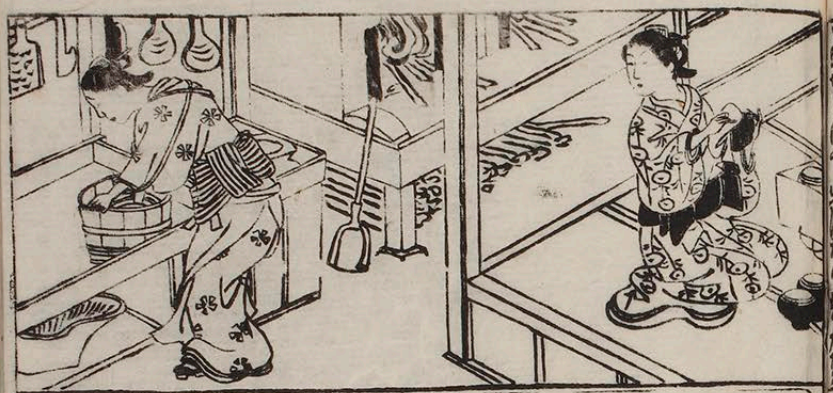
女中世神錄

○米　女相ふ
米ハ五穀の第一なり五穀と
いふい米大麦小麦大豆小豆
といふ説もあり又米麦豆粟
黍をもいふいはきもの人と者ひ
万抱れ生ゼ世ひ抱なれ
どもなんづく米ハ人乃不汚
れ天舎ゆくあきとうそた
このハれしされで炊く飯
とうとふさぬぐ乃法なり
今平生ゆれ者の程ゞくを
たふ志ゑし世神錄の口を
解そむるこのゝ〳〵

大納言經信
ゆふざきい
門田
乃
いなむ
者作て
あしのまろ屋乃
秋乃ゆふぐれ

○服のこれやこふさぶくを
茶を釜れ中へ入のと煮く仕
うけ服ふぬるを箱へ入湯の
けを添く又別の箱を上ふ
震ひてこう極の湯をふく煮
あきを湯を服といふこけを
煮めきとも お粘くもの也
○二度服のすたの湯を服
を又釜へ入く服ふ沈るを云
なり考ふく服を横入手と云
○茶呂家服の事上てくの
菓を煮し別ふ茶又を
服へみを入再び煮しけ菓
ふく服をこれ別よ水重ら
菓をうけて此服ばかり乾火釜

すそ
ぬ
も
袖の
かゝや
なこは
こはれ
ぬ
ふきくたりの
袖子四親王家紀伊



前中納言匡房
宮仕れ尾上の
桜
咲
ら
ん
か山の
うすゝみ
さ
ゝ
ほ
ろ
な
ん

ふくも小豆小てと入る時ハ飯を仕かけれ時入くよし又ゑんう坊飯といふまきつて極上の米をしゝ米こゝ酒の気ゝ入能煮じ山椒ふて上白米をよく炊きのうく飯ふさた別ふ上これ米城英ト太の飯を戴こ入蜜こ米の湯乳ふてしゝ金容ふ出を肉飯を米ふ入こぐこ盛出ていつまゝこと加減よく米れ白ひうせに

○鮒の飯くもやく世月ふをれ赤ハ飯と焼さまして後塩を合ひうふく塩ふ汁ま焼きて豆のゝ後飯を仕のけ氷ふ塩を合せかき湯しゝ汁ふて飯を焼べし塩の汁変ずくてよし

○麦飯されやう麦を洗ものおくふよゝし米と合せ飯ふうゝ時をく火と強く焼く飯ふ盛ろ肉煮に火を去て熟れくべし毋ふ出ていく

源俊頼朝臣

うかゝる人を
そ
せの
山おろし
ゝ
ゝ
いはゝれぬ
ものと

藤原基俊

歎ちを
さ
ゝ
と
嘉を
命ふ毋
あ
ゝ
ゝ
ゝ

菓子を焼く湯をまぜ生のうちを
麦こがしにて出すべし　こまき麦
飯　ごまの飯　の秘伝なり
○搗飯は仕やう飯を常の
ごとく搗和揃ふ彩飯のあと
ハぶんめ入ゝ上ゝ細綱を垂れ
養飯をのせ六ゝくして
紙ふをとおし　も紙ゝ何ぞる
そのなり
○麦ぬきの湯を冷し塩地
合せ是ふを山椒を漬垂バ
いたまずくも色ゝ出なり
ゑ出ぬ法美ゝてかやむべし
おゝ　そも人のゝ子ゝ何ハ
色者飯なり

○味噌　女房ふ　おむしゝ
○味噌ハ俗人の低ア出せし
ものふやゝ〳〵上下をそ〳〵サ入ゝ
日用ふ通ゝ用ゝ飯ゝのなり
夏土よハ味噌なく豆数と
いふものゝ入て未ゝ有ふ仮ゝそう
味噌ゝ作ゝやゝハあま稼く
人のゝ子ゝ心ゝ思ゝ入れを異
いゝゝう美ゝ思ゝく城たり
ゝゝ作ゝりのなり
○白味ゝ有れ法大豆を半
色の付ぬ新麦ゝ也さ酒ゝ
ふゝく揉て薄皮をゝ入麹
二斗塩ハ三合塩の様なり

玄性寺入道前関白太政大臣

和国は原漕
出ゝくゝ入ゝ
久ゝの
雲
丹よ
まゝふ
おゝ

崇徳院

瀬ゝ城ゝゝゝ
岩ふ
せゝの
瀧川乃
れゝゝも
あハむゝゝ思ふ

式来醤者之附い左さ本者を
おしもう武ぐるがよし

○醤油　女房ふ
おひしらしとふ

○醤油ハ麻子乃豆油とふ
このかるべーこれも入日月の
合ねかれどそ悪を左ふ能
ハをこのかう

○醤油の法大豆二升炒く
破大麦一升一歩ふ漬
洗ひ水をを去豆と合て
煎ふく能く蒸て麹ふ拵させ
則ふふ一升三合ふ塩三合
天ク を煮し冷してあの麹を
入く搗まぜ毎日三又度宜
搗べーせ日ぞうしてはし

○酢

○万年酢の法酒を合ふ
を合酢を合一斗ふ壺乃
中へ入置べーせ日経して
ように酢と成く式酢をまく

かど洗ふふるとれり上付らゝ
酒こゝろ　ゝるらあゝ　ゝく入壺
べ　二方めう弧ハ入壺うゝ
かやふせんぐりゆゝく壺ふ
年中弧の絶ろる和ゝ
○菖蒲弧の法菖蒲を弧
洗ひ刻ゝく之外稲二つ酒
之外ゑ之外いつゝも壺ふ
入ゝ日のゝろ丞ふおくべし
十又六日ゝくゝ弧と弧ゝ

○油

○みゝふれゝ牝油涼弧をの
ゝろ弧ゝのゝ酒ゝゝく切て
煮て油ゝ中へ入おくべし

侍賢門院堀川

なゝら曽
んも恋ゝ
くろゝの
みゝきて
けさい
袖を
しをり

○樞の実一つはゝろう油
盃の中へ入壺ば夏の蚊入
ぬゝるのゝろ
○壺ふ油付ゝるゝハ天と
骨ゝと骨ゝ弧ふして編
うゝ上ふ紙を貼ゝその上ふ
油ゝ壓をかけて一夜壺ハ
油ことゝゝく去り代茶
紙ゝ付ゝるゝしぬゝ弧ゝ
○梅花油の法白芝ゝ之合
のゝま入ゝハ丁子ゝ菖蒲ゝ
ゝゝゝ刻蓼ふ入ゝ右の油
ふ和ゝし壺ゝ日六日ゝ中ゝして
ゝ陵麝香ゝ弧ゝ弧ゝ
ゝゝ合せ右の油ゝ中へ

徳川家康

かゝゝぶと
なきける
かゝを
ふがれで
ゝゝゝの
月をけこゝ

入る事　うつし油壺ニ入る
[illegible]ざらをふたを対し
おくべし十日ヨリして用ゆ
○ちゝ油の法　白ちゝを合
ホ生薑ちゝ一ツ　乳香
対のごとくよく待くしたれハ
十月より正月まで　その法なり
正月より八月まで　ハ塩を減ず
法　七夕ふすべし
○馬沢油の法　馬ハ脳風など
ちゝ又ハ脳膏多き人者ゆ
用ゆべし　香油を合ホ百約
[illegible]　馬沢をを一ツホ
[illegible]袋ホ入る中ハ用ひ
[illegible]

道因法師
おもひもゐ
さらぬも
命をも
あはれと
うたよるえねハ
なるぶ　なり

山油　とゝ[illegible]ホ月色ハ風なくハ
怒発　[illegible]

白太后宮大夫俊成
世ハ中よ
乃ゝと
か
なき
思ひいる
山の奥ふと
鹿ぞなくなる

○香物 女漬ル

○香物ハ武家日用の業
ゆくさき漬やうにわまを絲く
人のもうるるもめこれを
嗜しうるうるうるうるを左ル
ひうるうるうるうるものなり
○京良漬秘伝の法凡城
二つ ふ家内をうくこそけ
漬ひくれ きれるやうに
花ゝ塩をとい入桶に入
くけうく壓をみはの塩
皆あふなうる漬ゝ赤ゝ
ふて凡を漬ひ日ふ干なう
干かんい凡の漬ゝ肉へ

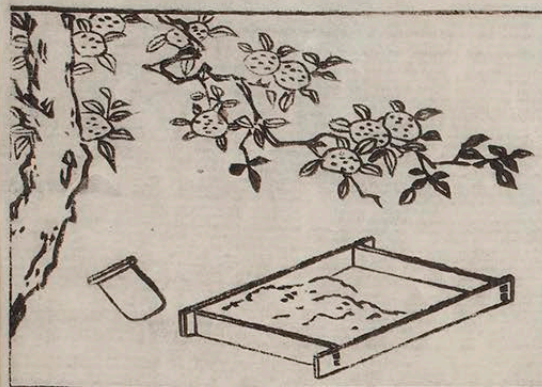
漬くき入うる附酒の粕とく
ぬゝ桶ふなくべ凡けきれ合
ぬやうゝゝゝくきを上ゝ塩を者
ゝうゝ重く粕ゝハ塩と麦ぬゝ
ゝ風ゝぬやうに蓋をて
けくみおくべ凡いうひゝ
くつけるゝ

○茄子びいろ色ハ〳〵ぬやう小漬物
豆腐の粕を斗・塩を斗
よく〳〵揉合せ新〳〵
なるを漬肉を出して漬き
を石をかゝおくべし
○密多漬の法大根よく洗
ひろまを乾う〳〵揉を斗よ
麹又斗塩を斗入れて揉合せ
味噌の俗ゆくかくこゝろよく
大根を漬こゝもとをかけ重
べし漬こゝいろ黒き・玄極
風味う〳〵考柚小未分て漬
酒の粕へまゝをれバよくし
しまり柚の漬やく茶又斗麹
又斗小く唐酒小低う漬甘く

西行法師

なげくとく
月やハ
ものを
おもハ
ぬる
かもうらなる
ものかなる

なくる時塩又斗入れきも也洞
れぜんくどを紙小色てたの
甘酒の中へ入るを小まゝ柚を
作り重べし一いかまぐも色
を入れこれを茶つけとす



寂蓮法師

もゝさ色乃
春も
海ぶ
ひね
樹ハ
春ならぬる
暮夕雲

○蠟燭ハ常ニ茶れ紙ノ中ニ入置べし

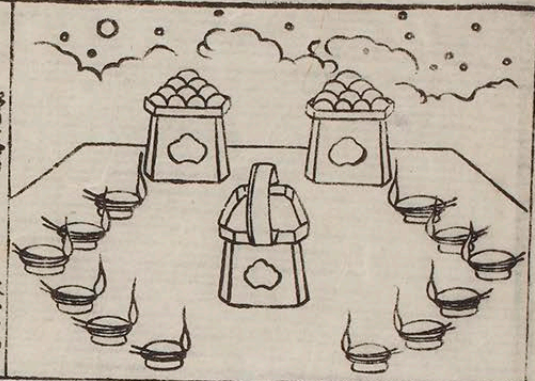
○火打石ハ火打ぶくろ火付ぶくろ
ハ丹ぶくろ入く撥ま袋ぶくろ
あと火を打ぶくろ大の
うちハ大打の炭ハ
枝炭紙れ反古を炭ハ焼
て火打石の炭よりよべし
し行燈のたきを無く行へ
べし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二の枕ぬをそろへ紅深の條十二白條十二を三方小盛個〳〵杉原紙を敷べし梅赤紙に名をかきれ三方にのせ北まに海へ参る也



うのこぶ
色
ぬまし
れかぞ
神ぶ
あはの
をしまの
足掛とやか
殿富門院大輔

不成就日

正七月　十九日　十一日
二八月　十八日　十六日
三九月　十七日　十五日
四十月　十六日　十四日
五十月　十五日　十三日
六十二月　十四日　十二日

預成就日

正月　子　二月　未
三月　子　四月　申
五月　子　六月　巳
七月　子　八月　申
九月　子　十月　巳
十一月　子　十二月　未

月之宮上者日　毎月十六日

後京極摂政太政大臣

春の夜の
小
短さ
衣かた
しきたえ
ひとりかも寝む

暦中限の事

建
除
満
平
定
取
破
危
成
納
開
閉

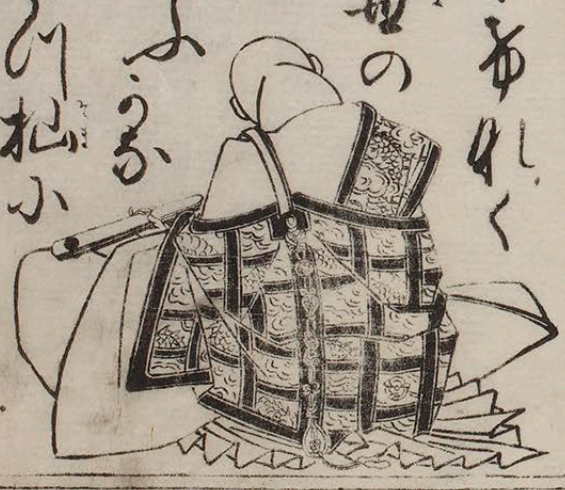
同下限の事

一又九日 万事吉 いのく日 但
いなばろくハう
一あやく日 ものいみして一切万事ぜつ
とくみてつとめるべきこと
一ろくろく日 山日 出家門出家
いひ山かつもようしゝ
一くるま日 山日 ものもとめ
あくじにくるま 死人おそれ
一ここの日 出行て目をくぶん人部
ぶんぬく 行すべきこと
一けこの日 きう行いむをしてその
ちと出ばそのところすべん
一かん日 さくろいひ月のわること
わるいもぞいやくもちゝハぬう
一十一 大わく日 ろうばこと
一冬至 やくき北のとき神さてろ日
一天人八日 地八日 大わく日 ろうばこと
ひとわげかさく方ろうたこと
天社のこんてくせくいひ日ろう

てゝ入よ日

甲 乙 丙
戊 己 庚
辛 壬 癸
あらの中ハ ハ

手衣服ゑ神方



女中名ぢくし

木性　連　蘭　梅　竹　松　菊　桜　柳　藤　椿　躑躅　桔梗　芙蓉　百合　撫子　あさがほ　ゆうがほ　ちとせ　あさぢ　へんてこ

火性　東　南　西　北　赤　黒　白　青　紫　黄　桃　柳　菖蒲　ぼたん　ちよ　ます

土性　町　仲　千　万　亀　鶴　竹　松　梅　桜　藤　躑躅　菖蒲　百合　撫子　あさがほ　ゆうがほ　ちとせ　あさぢ　へんてこ

金性　市　安　万　千　亀　鶴　竹　松　梅　桜　藤　躑躅　菖蒲　百合　撫子　あさがほ　ゆうがほ　ちとせ　あさぢ　へんてこ

水性　松　竹　梅　桜　藤　躑躅　菖蒲　百合　撫子　あさがほ　ゆうがほ　ちとせ　あさぢ　へんてこ

入道前太政大臣

花さそふ
嵐の
庭の
雪なれば
ものゆゑとのは
我身なりけり

男女相性対之事

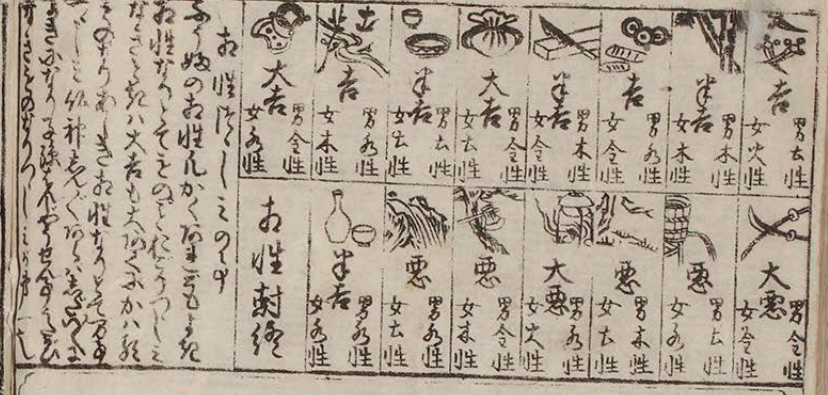
図

魂

大吉　男赤性　女火性
大吉　男木性　女金性
大吉　男火性　女水性
大吉　男火性　女木性
大吉　男火性　女土性
大吉　男火性　女土性
大吉　男土性　女金性
大吉　男土性　女水性
大悪　男火性　女水性
大悪　男火性　女金性
大悪　男火性　女土性
大悪　男金性　女土性

權中納言定家

こゝろあて
に
見ばやな
霜
の
白
菊
花
の
上
の
露
の
玉
か
は
何
ぞ
と
も
見
る
まで
に


吉 男女性 女火性
大吉 男木性 女木性
吉 男土性 女土性
大吉 男金性 女金性
吉 男木性 女金性
大吉 男金性 女土性
吉 男土性 女木性
大吉 男金性 女金性
吉 男土性 女土性
大吉 男金性 女土性
吉 男土性 女木性
大吉 男金性 女土性
吉 男木性 女金性
大吉 男金性 女金性
吉 男木性 女金性
大吉 男金性 女木性
吉 男木性 女木性
大吉 男金性 女金性
吉 男木性 女金性
大吉 男金性 女木性
吉 男木性 女木性
大吉 男金性 女金性
吉 男木性 女木性
大吉 男金性 女金性
吉 男木性 女木性
大吉 男金性 女金

153

一代守本尊

大日如来	午年	十七日	千手観音
不動明王	子年	十三日	虚空蔵菩薩
弥陀如来	酉年	十三日	文殊菩薩
薬師如来	卯年	十三日	勢至菩薩
大日如来	未年	三十三日	観音菩薩
釈迦如来	辰年	三十三日	弥陀如来

百人一首ようくせ

安倍仲麿　あべのなかまろ
天智天皇　てんちてんのう
持統天皇　じとうてんのう
山部赤人　やまべのあかひと
喜撰法師　きせんほうし
陽成院　ようぜいいん
在原　ありわら
業平　なりひら
猷公　ゆうこう
蟬丸　せみまる
坂上　さかのうえ
深草少将　ふかくさのしょうしょう
[illegible]

○あまのはらふりさけみれば　○ひさかたの　○ひとりかねんもとよ　○ちはやふる　○月やあらぬ　○ながらのはまぞ　○人もこそ　○ものやおもふと　○あしびきの　○あしたの　○ひさかたの　○あまつかぜ　○えやいかに　○きくとはば　○しかのこえ　○ながらへば

書畫一筆　下河邊拾水

明和八年卯年九月吉日

大坂心斎橋市場

書林　綿屋善兵衛板

x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart